

【文献】

1. Hawton K, Fagg J. Suicide, and other causes of death, following attempted suicide. *Br J Psychiatry*. 1988;152:359-366.
2. Hawton K, Townsend E, Arensman E, et al. Psychosocial versus pharmacological treatments for deliberate self-harm. *Cochrane Database Syst Rev*. 2000(2):CD001764.
3. Rygnestad T. Mortality after deliberate self-poisoning. A prospective follow-up study of 587 persons observed for 5279 person years: risk factors and causes of death. *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol*. 1997;32(8):443-450.
4. Owens D, Horrocks J, House A. Fatal and non-fatal repetition of self-harm. Systematic review. *Br J Psychiatry*. Sep 2002;181:193-199.
5. Hawton K, Fagg J. Deliberate self-poisoning and self-injury in adolescents. A study of characteristics and trends in Oxford, 1976-89. *Br J Psychiatry*. 1992;161:816-823.
6. Rhodes AE, Links PS. Suicide and suicidal behaviours: implications for mental health services. *Can J Psychiatry*. 1998;43(8):785-791.
7. Morgan HG, Barton J, Pottle S, Pocock H, Burns-Cox CJ. Deliberate self-harm: a follow-up study of 279 patients. *Br J Psychiatry*. 1976;128:361-368.
8. Turner RJ, Morgan HG. Patterns of health care in non-fatal deliberate self-harm. *Psychol Med*. 1979;9(3):487-492.
9. Adam KS, Isherwood J, Taylor G, Scarr G, Streiner DL. Attempted suicide in Christchurch: three-year follow-up of 195 patients. *N Z Med J*. 1981;93(685):376-381.
10. Rygnestad TK. Prospective study of social and psychiatric aspects in self-poisoned patients. *Acta Psychiatr Scand*. 1982;66(2):139-153.
11. O'Brien G, Holton AR, Hurren K, Watt L, Hassanyeh F. Deliberate self-harm and predictors of out-patient attendance. *Br J Psychiatry*. 1987;150:246-247.
12. Owens DW, Jones SJ. The accident and emergency department management of deliberate self-poisoning. *Br J Psychiatry*. 1988;152:830-833.
13. Macharia WM, Leon G, Rowe BH, Stephenson BJ, Haynes RB. An overview of interventions to improve compliance with appointment keeping for medical services. *Jama*. 1992;267(13):1813-1817.
14. King CA, Segal H, Kaminski K, Naylor MW, Ghaziuddin N, Radpour L. A prospective study

- of adolescent suicidal behavior following hospitalization. *Suicide Life Threat Behav.* 1995;25(3):327-338.
15. Van Heeringen C, Jannes S, Buylaert W, Henderick H, De Bacquer D, Van Remoortel J. The management of non-compliance with referral to out-patient after-care among attempted suicide patients: a controlled intervention study. *Psychol Med.* 1995;25(5):963-970.
16. Goldacre M, Seagroatt V, Hawton K. Suicide after discharge from psychiatric inpatient care. *Lancet.* 1993;342(8866):283-286.
17. Dennehy JA, Appleby L, Thomas CS, Faragher EB. Case-control study of suicide by discharged psychiatric patients. *Bmj.* 1996;312(7046):1580.
18. Gibbons JS, Butler J, Urwin P, Gibbons JL. Evaluation of a social work service for self-poisoning patients. *Br J Psychiatry.* 1978;133:111-118.
19. Hawton K, McKeown S, Day A, Martin P, O'Connor M, Yule J. Evaluation of out-patient counselling compared with general practitioner care following overdoses. *Psychol Med.* 1987;17(3):751-761.
20. Salkovskis PM, Atha C, Storer D. Cognitive-behavioural problem solving in the treatment of patients who repeatedly attempt suicide. A controlled trial. *Br J Psychiatry.* 1990;157:871-876.
21. McLeavey BC, Daly RJ, Ludgate JW, Murray CM. Interpersonal problem-solving skills training in the treatment of self-poisoning patients. *Suicide Life Threat Behav.* 1994;24(4):382-394.
22. Evans K, Tyrer P, Catalan J, et al. Manual-assisted cognitive-behaviour therapy (MACT): a randomized controlled trial of a brief intervention with bibliotherapy in the treatment of recurrent deliberate self-harm. *Psychol Med.* 1999;29(1):19-25.
23. Morgan HG, Jones EM, Owen JH. Secondary prevention of non-fatal deliberate self-harm. The green card study. *Br J Psychiatry.* 1993;163:111-112.
24. Cotgrove AJ, Zrinsky L, Black D, Weston D. Secondary prevention of attempted suicide in adolescence. *J Adolesc.* 1995;18:569-577.
25. Linehan MM, Armstrong HE, Suarez A, Allmon D, Heard HL. Cognitive-behavioral treatment of chronically parasuicidal borderline patients. *Arch Gen Psychiatry.* 1991;48(12):1060-1064.
26. Linehan MM, Heard HL, Armstrong

- HE. Naturalistic follow-up of a behavioral treatment for chronically parasuicidal borderline patients. *Arch Gen Psychiatry*. 1993;50(12):971-974.
27. Motto JA, Bostrom AG. A randomized controlled trial of postcrisis suicide prevention. *Psychiatr Serv*. 2001;52(6):828-833.
28. 岸泰宏, 黒澤尚. 救命救急センターに収容された自殺者の実態のまとめ. *医学のあゆみ*. 2000;194:588-590.
29. Luoma JB, Martin CE, Pearson JL. Contact with mental health and primary care providers before suicide: a review of the evidence. *Am J Psychiatry*. 2002;159(6):909-916.
30. Rutz W, Walinder J, Eberhard G, et al. An educational program on depressive disorders for general practitioners on Gotland: background and evaluation. *Acta Psychiatr Scand*. 1989;79(1):19-26.
31. Rutz W, von Knorring L, Walinder J. Long-term effects of an educational program for general practitioners given by the Swedish Committee for the Prevention and Treatment of Depression. *Acta Psychiatr Scand*. 1992;85(1):83-88.
32. Thompson C, Kinmonth AL, Stevens L, et al. Effects of a clinical-practice guideline and practice-based education on detection and outcome of depression in primary care: Hampshire Depression Project randomised controlled trial. *Lancet*. 2000;355(9199):185-191.
33. Gilbody S, Whitty P, Grimshaw J, Thomas R. Educational and organizational interventions to improve the management of depression in primary care: a systematic review. *Jama*. 2003;289(23):3145-3151.
34. Von Korff M, Goldberg D. Improving outcomes in depression. *BmJ*. Oct 27 2001;323(7319):948-949.
35. Jimenez-Jimenez FJ, Garcia-Ruiz PJ, Molina JA. Drug-induced movement disorders. *Drug Saf*. 1997;16(3):180-204.
36. 高橋邦明, 内藤明彦, 森田昌宏, 須賀良一, 小熊隆夫, 小泉毅. 新潟県東頸城郡松之山町における老人自殺予防活動-老年期うつ病を中心とした-. 精神神経学雑誌. 1998;100:469-485.

【表一】

自殺既遂前のヘルス・ケア利用 (Inclusion criteria: Psychological autopsy, record reviews, or record reviews plus additional sources of information) : Review of 40 studies ²⁹

	1ヶ月以内	一年以内	生涯
メンタル・ヘルス利用			
トータル	18.7%	32.1%	53.0%
35歳以下	15.3%	24.0%	38.4%
55歳以上	11.0%	8.5%	19.5%
プライマリー・ケア利用			
トータル	44.8%	76.6%	-
35歳以下	22.8%	62.4%	-
55歳以上	58.0%	77.0%	-

厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）
分担研究報告書

Birleson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) による
中学生における抑うつ傾向に関する調査

研究協力者 伊藤幸生（東海大学医学部医学研究科）
主任研究者 保坂 隆（東海大学医学部基盤診療学系）

【研究要旨】

中学生における抑うつ傾向について検討するため、Birleson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) を用いて調査を行った。対象は静岡県の中学校 1 年生から中学 3 年生までのすべての項目に回答した計 557 名（男子 285 名、女子 272 名）である。調査の結果、学年間においては 1 年生 > 3 年生 > 2 年生の順に得点の変化が見られ年齢が上がるごとに得点も上昇するといった過去の報告とは異なる結果となった。また、兄弟の有無や順位関係について有意差はみられなかつたが、女子が男子に対して有意に高いこと、さらには抑うつが強くうつ病圈を予測するための臨床的判別点 (cut off score 16 点) 以上のものが 24.6% となり今回の調査対象者のほぼ 4 人に 1 人に抑うつ症状がみられるという結果となった。

A. 研究目的

わが国における自殺による死者数は 1998 年以来、ずっと 3 万人を超える年が続いている。日本人の死因統計によれば自殺は第 6 位であるが、15 歳から 54 歳のいわゆる生産年齢人口を 5 歳ごとに区切ると自殺はどの年代区分でも 1 位か 2 位になっている。また、若干前述の区分と重なるが、50 歳以上の自殺者数も 1998 年以来、2 万人を越えている。自殺者が急増し始めたこの時期はバブルおよびバブル崩壊といわれる時期とかさなるため特に関心の対象は中高年、いわゆる「働き盛り」の世代と仕事からリタイアし生活に大きな不安を抱える高齢者が中心とされてきた。仕事や生活に対する不安は大きなストレッサーであることは想像に難くないが、生活に不安感を持っているからといってそう感じているほとんどの人は自殺にまでいたっているわけでは

ない。この境界を分けるひとつの要因として「うつ病」の罹患が考えられ、うつと自殺に関する多くの研究がなされてきた。就労前の未成年に関するうつの研究についても 1980 年に DSM-III に初めて子どものうつに関する定義がなされて以来研究されてきたがわが国においては近年になってようやく子どものうつの問題に大きな関心が向けられるようになってきている。うつ症状を抱える子どもは、学業成績の低下や対人関係の問題を起こすとの報告や (Puig-Antich et al., 1985), 中学 3 年生の抑うつ状態を抑うつ尺度 (DSRS-C) を用いて検討した結果、DSM-IV の大うつ病エピソードの主症状と尺度因子に近似性を示唆した抑うつ症状に 22.8% があてはまり、抑うつ症状をもつ中学生が少なからず存在するという結果を示したもの (傳田ら, 2002) などの研究を踏まえ近年、内面的不適応要因として「抑

うつ」との関連を指摘するものも増えている（小保方, 2005）。

しかし、未だ充分に調査されているとはいえない、疫学的調査としてはまだ数が少ないのが現状である。傳田ら(2002)、村田ら(1996)のデータは貴重なものであるが、傳田らの研究は北海道、村田らの研究は福岡という地域の報告である。傳田らは北海道内において地域性に有意差はないとの報告をしているが改めて地域性を考慮する必要もあるのではないかと考えた。

本調査では先行研究を補足・再確認する上でも本州中央部に位置する静岡県においてわが国の中学生の抑うつ状況を調査した。調査尺度として比較的簡便に実施できるうえ、抑うつが強くうつ病圈を予測するための臨床的判別点(cut off score)が設けられている子ども用抑うつ自己評価尺度(Deprssion Self-Rating Scale for Children; DSRS-C)(Birleson, 1981)の日本語版(村田ら, 1996)を用いて調査することを目的とした。

B. 研究方法

B-1. 調査対象

対象は静岡県の公立中学校1年生から3年生計566名(男子290名、女子276名)、1年生209名(男子102名、女子107名)、2年生167名(男子92名、女子75名)、3年生190名(男子96名、女子94名)である。調査の目的と実施方法および個人情報の取り扱いに関する説明を校長をはじめ全教職員に対し窓口となった養護教諭と連携して実施した。生徒および保護者に対しては学校保健委員会にて総括を説明した。調査は各クラスにて担任教諭が「こころの調査」として取り扱い説明をした後、設問内容の理解を深めるために生徒個人の黙読だけでなく1問ずつ教員による音読によって実施された。

なお、本研究は著者の所属する東海大学の倫理委員会にて承認を得ている。

B-2. 調査手続き

2006年8月に質問紙を配布し各クラスにおいて学級活動の時間に全校一斉に実施された。対象者は調査票を記入した後、クラスごと封筒に入れ厳封したものを著者が直接回収し集計した。

B-3. 調査内容

まず、フェイスシートにて情報の管理・取り扱いについて、良い答え・悪い答えということはないこと、思ったとおりに答えてほしいことなどの説明に加え、性別、学年、兄弟の有無および兄弟関係を確認した。

抑うつ症状の測定には、子ども用抑うつ自己評価尺度(Deprssion Self-Rating Scale for Children; DSRS-C)(Birleson, 1981)の日本語版(村田ら, 1996)18項目を採用した。尺度の信頼性と妥当性は、ともに高い水準であることが示されている。回答は、「いつもそうだ(2点)」、「ときどきそうだ(1点)」、「そんなことはない(0点)」の3件法で行われる。また中には反転項目が設定されているが、採点の際には変換し合計得点を算出する。得点の高いものが抑うつ症状の高いものとされる。

なお、統計ソフトはSPSS14.0を使用した。

C. 結果

C-1. 抑うつ傾向の解析について

解析対象者は子ども用抑うつ自己評価尺度(Deprssion Self-Rating Scale for Children; DSRS-C)のすべての項目に回答した計557名(男子285名、女子272名)とし、全対象者(566名)中、1問でも欠損のあるもの(9名)は除外した。本尺度全体の α 係数は=.827となり内的整合性は示された。合計得点の平均は全体で11.6点であつ

た。合計得点の分布を図1に示す。加えてDSRS-Cの回答得点構成(%)および各項目の平均と標準偏差を表1に示した。

DSRS-Cを作成したBirleson(1981)は、抑うつ状態を示し、気分障害の範疇に含まれる児童と、それら判断にあてはまらない児童との本尺度による判定のためのcut off scoreを15点と設定しているが、DSRS-Cの日本語版を作成した村田ら(1996)によれば、日本においては16点がcut off scoreとして妥当であるとしているため、本研究においても同様にcut off scoreを16点に設定した。また、DSRS-Cの適応年齢は、Birleson(1981)では7歳から13歳とされていたが、その後青年期にも適応が可能との報告もあり(Firth and Chaplin, 1987)、国内における日本語版においても中学3年生までの調査研究がある(傳田ら, 2002)。内容についても内的整合性が示されており($\alpha=.85$)、加えて本尺度は小学生にもわかるように高い語彙能力も認知能力も必要とせず、簡便に適用できること、さらに妥当性もあると判断できるため、本研究でも中学生に対して使用することとした。また、項目ごとにおける差についての比較検討は検定の多様性の観点から今回は行わず、合計得点のみを解析の対象とした。

C-2. 抑うつ傾向の男女差について

DSRS-Cの合計得点の平均は男子10.8点、女子12.4点であった。男女間においてWilcoxonの順位和検定を実施したところ $P=0.002^{**}$ と示され、有意差が認められた。また、cut off score16点以上のものは男子59名(男子の20.7%)、女子78名(女子の28.6%)の計137名(全体の24.6%)であった(図2)。

C-3. 抑うつ傾向の学年差について

DSRS-Cの合計得点に基づき学年間(1年

生207名:平均11.57点、2年生161名:平均11.95点、3年生189名:平均11.29点)においてKruskal-Wallis検定を実施したところ $P=0.800$ と示され有意差は見られなかった。平均値は2年生>1年生>3年生の順に得点が高い傾向が見られた。加えて学年ごとの合計得点分布を図3に示す。また、cut off score16点以上のものは1年生51名(16点以上全学年の37.2%)(1年生の24.6%:男子17名16.8%, 女子34名32.1%), 2年生45名(16点以上全学年の32.8%)(2年生の27.9%:男子20名22.7%, 女子25名34.2%), 3年生41名(16点以上全学年の29.9%)(3年生の21.6%:男子22名22.9%, 女子19名20.4%)であった(図4)。

C-4. DSRS-Cと兄弟の有無および兄弟の順位関係との関連について

DSRS-Cの集計得点に基づき兄弟のいるものと一人っ子との間(兄弟あり488名:平均11.72点、一人っ子69名:平均10.62点)においてWilcoxon順位和検定を実施したところ、 $P=0.179$ と示され有意差は見られなかった。また、兄弟の順位関係による類型分類(一人っ子69名(12.4%), 年上の兄姉のみいる211名(37.9%), 年下の弟妹のみいる215名(38.6%), 上下ともにいる62名(11.1%))間においてKruskal-Wallis検定を実施したところ、 $P=0.1557$ と示され兄弟の有無と同様に有意差は見られなかった。

D. 考察

本研究の目的は、子どもの心的要因として問題とされつつある「抑うつ」について中学生を対象に調査することであった。調査の結果、学年間および兄弟の有無や順位関係について有意差はみられなかつたが、女子が男子に対して有意に高いこと、さらにはcut off score16点以上のものが

24.6%いるという点に関しては若干本研究の数値のほうが高く出ているが傳田ら(2004)の報告 22.8%に近似した結果となった。ただ 24.6%となるとほぼ 4 人に 1 人ということになるため、これが現代の病理と恣意的にいうよりは、傳田ら(2004)も cut off score の検討を今後の課題としているようにさらなる症例検討が必要と考えられる。しかしながら、上記研究で DSRS-C の構成内容は DSM-IV の大うつ病エピソードの主症状としてとりあげられ、児童・青年期の抑うつ症状と成人の大うつ病エピソードとの近似性が示唆されたことは単純に cut off score の設定の変更で済まされるような問題ではなくアセスメント全体の問題として慎重に検討していく必要があると思われる。

E. 結論

本研究では調査対象となった中学生の 4 人に 1 人(24.6%)に抑うつ症状がみられるというかなり高い結果が示されたが、先行研究の値と比べても近似していることからわが国において中学生の抑うつ症状に関して地域差がないこと、また、子どもの自殺に関して「いじめ」だけではない重要な要因であることが示唆された。今後、本研究での尺度項目以外の内外要因を含めた調査研究が必要であること、さらには自己記入式の限界や false positive の問題を十分に考慮しつつも躁病エピソードなどに見られる易怒性のようなものについて、普段は静かに落ち着いているようにみえるが突然キレたり、不登校になったりするといったものを単なる抑うつ症状だけでなく内外因子から多面的に捉える調査を検討していくことも必要ではないかと考える。

【参考文献】

警察庁生活安全局地域課 2007 平成 17 年中における自殺の概要資料

Puig-Antich, J., Lukens, E., Davis, M. et al. 1985 Psychosocial functioning in prepubertal major depressive disorders: I. Interpersonal relationships during the depressive episode. Archives of General Psychiatry, 42, 500-507.

傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山司 2004 小・中学生の抑うつ状態に関する調査—Birleson 自己記入式抑うつ評価尺度(DSRS-C)を用いて児童青年精神医学とその近接領域, 45, 424-436.

小保方晶子・無藤隆 2005 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向の関連 心理臨床学研究 第 23 卷 第 5 号 533-545.

Peter Birleson 1981 The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self-rating scale: A research report Journal of Child Psychology Psychiatry, 22, 73-88.

村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 1996 学校における子どものうつ病—Birleson の小児期うつ病スケールからの検討 最新精神医学, 1, 131-138.

Firth, A. & Chaplin, L. 1987 Research note :The use of the Birleson depression scale with a non-clinical sample of boys. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 28, 79-85.

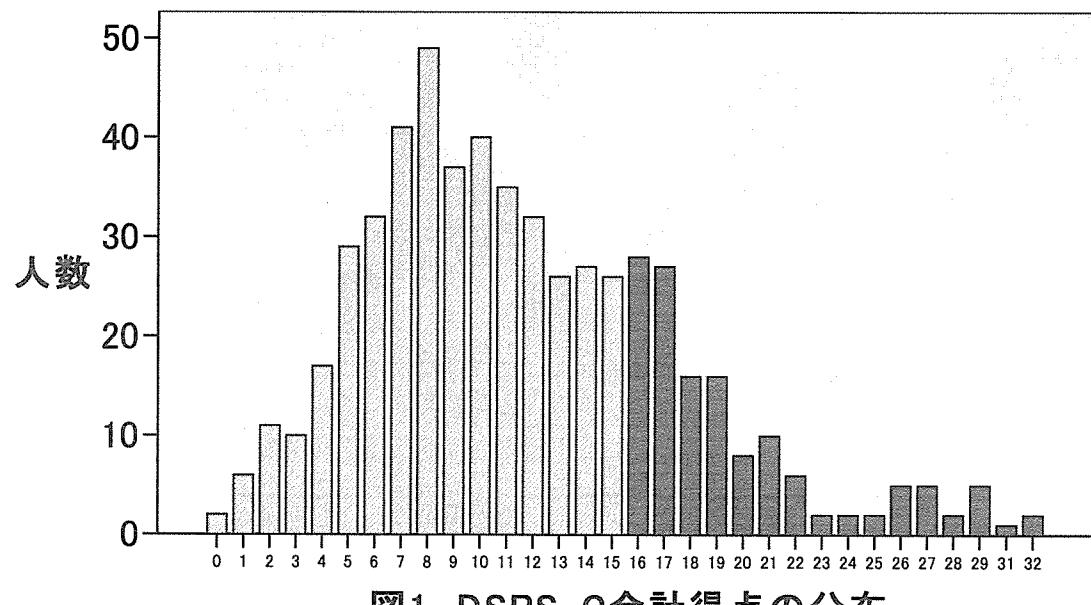


図1 DSRS-C合計得点の分布

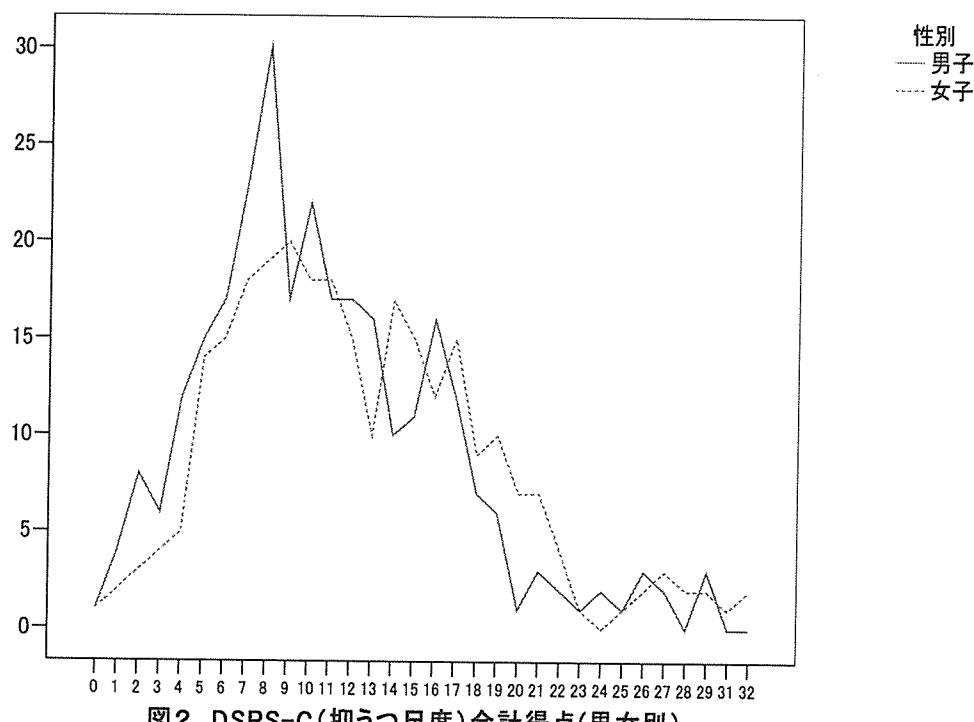


図2 DSRS-C(抑うつ尺度)合計得点(男女別)

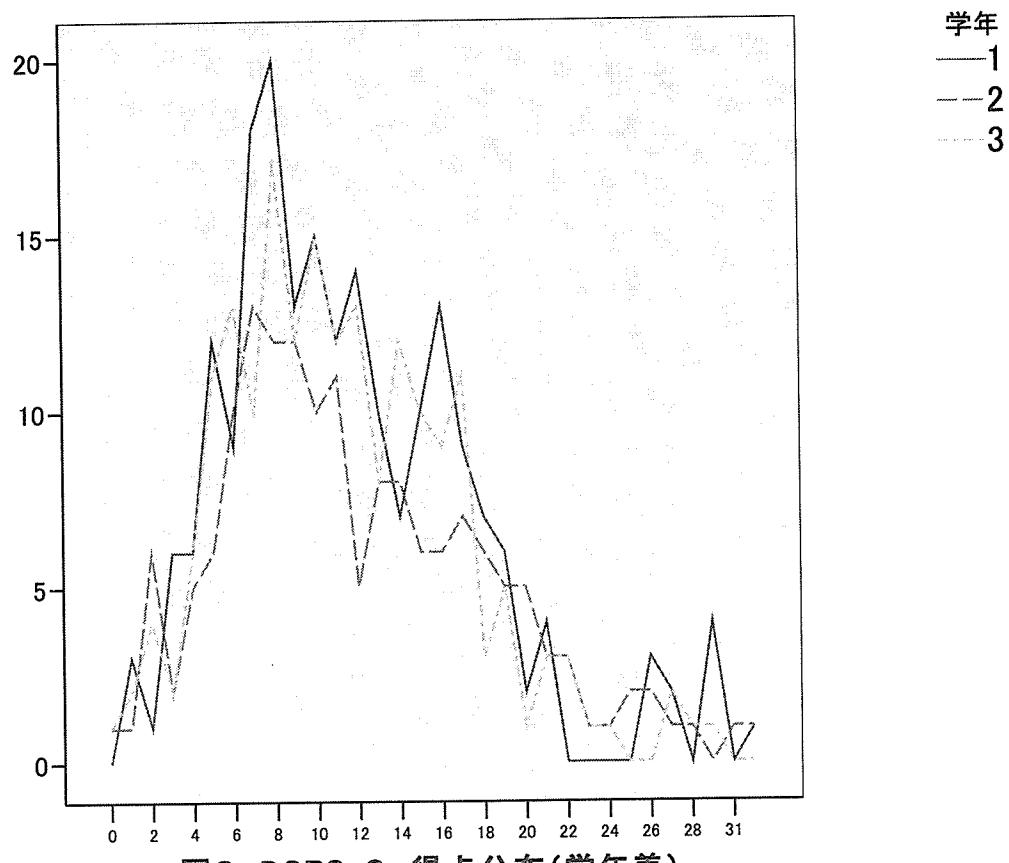


図3 DSRS-C 得点分布(学年差)

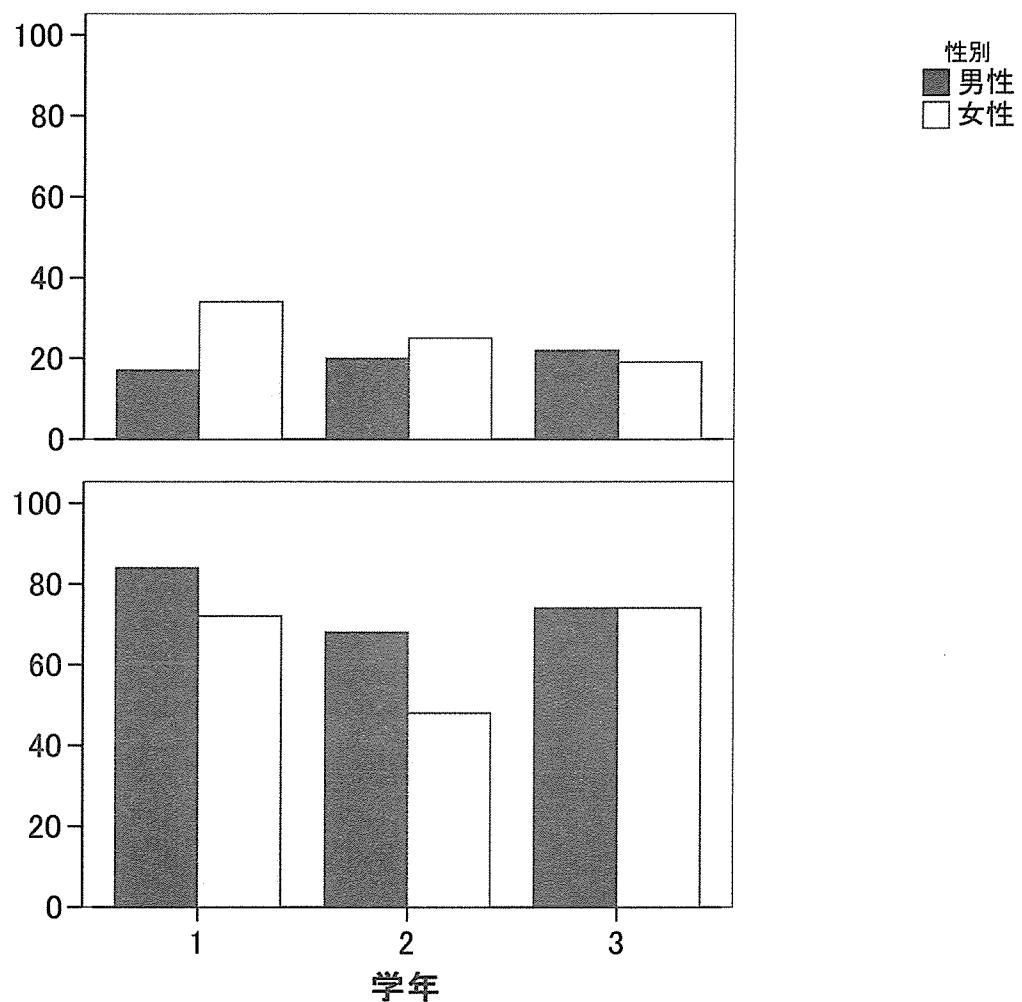


表1 DSRS-Cの得点構成(%)と項目平均と標準偏差

No	項目内容	得点比率(%)			項目平均(点)	標準偏差
		0	1	2		
1	楽しみにしていることがたくさんある(反転)	42.8	48.8	8.5	0.66	0.62
2	とても良くねむれる(反転)	35.0	45.9	19.1	0.84	0.71
3	泣きたいような気がする	51.5	38.7	9.8	0.58	0.66
4	遊びに出かけるのが好きだ(反転)	70.6	21.8	7.6	0.37	0.62
5	逃げ出したいような気がする	49.0	40.7	10.3	0.61	0.66
6	おなかがいたくなることがよくある	28.8	54.9	16.3	0.87	0.66
7	元気いっぱいだ(反転)	45.6	44.0	10.4	0.65	0.66
8	食事が楽しい(反転)	59.8	33.7	6.6	0.47	0.61
9	いじめられても自分で「やめて」と言える(反転)	34.1	40.8	25.1	0.91	0.76
10	生きていてもしかたがないと思う	68.1	24.6	7.3	0.39	0.62
11	やろうと思ったことがうまくできる(反転)	11.3	66.7	21.9	1.11	0.56
12	いつものように何をしても楽しい(反転)	63.7	32.4	3.9	0.40	0.56
13	家族と話すのが楽しい(反転)	59.9	30.9	9.2	0.49	0.66
14	こわい夢を見る	51.3	40.5	8.1	0.57	0.63
15	ひとりぼっちの気がする	54.2	36.8	9.0	0.55	0.65
16	落ち込んでいてもすぐに元気になる(反転)	39.8	41.7	18.6	0.79	0.73
17	とても悲しい気がする	59.1	33.6	7.3	0.48	0.62
18	とてもたいくつな気がする	34.9	46.4	18.8	0.84	0.71

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

【書籍】

- 保坂 隆 (編集) : シリーズ臨床研修医指導の手引き「精神科」。診断と治療社, 東京, 2004
- 保坂 隆 : Type A. 樋口輝彦 (監修) 久保木富房・中村純・山脇成人 (編集) : ストレス疾患ナビゲーター。138-139, 2004
- 保坂 隆, 佐藤 武 : 精神疾患に起因する身体症状・身体疾患。坂田三允 (編集) 精神看護エクスペール3 「身体合併症の看護」: 21-38, 2004。
- 武内克也, 酒井明夫, 大塚耕太郎 : 2004, オランザピン・糖尿病, in 新規抗精神病薬のすべて, 136-139, 先端医学社, 東京
- Matsuoka Y: Delirium. In Albrecht GL (Ed) Encyclopedia of Disability, SAGE, Thousand Oaks, in press
- Matsuoka Y, Nagamine M, Uchitomi Y: Intrusion in individuals with breast cancer. In: Kato N, Kawata M, Pitman RK (Eds) PTSD: Brain Mechanism and Clinical Implications, Springer-Verlag, Tokyo (in press)
- 中島聰美, 松岡豊, 金吉晴 : PTSD. チーム医療のための最新精神医学ハンドブック (大野裕編) 弘文堂, 東京(印刷中)
- 保坂 隆 (編集) : 神経症性障害とストレス関連障害。精神科臨床ニューアプローチ。メジカルビュー社, 東京, 2005
- 保坂 隆 (編集) : 児童精神障害。精神科臨床ニューアプローチ。メジカルビュー社, 東京, 2005
- 保坂 隆 (編集) 精神科専門医にきく最新の臨床。中外医学社, 東京, 2005
- 保坂 隆 : 現代社会とストレス関連障害の概念。保坂 隆 (編集) 神経症性障害とストレス関連障害。9-12, メディカルビュー社, 東京, 2005
- 保坂 隆 : 他科とのリエゾン精神医学での注意点。上島国利・立山萬里 (編集) 精神医学テキスト。283-288, 南江堂, 東京, 2005
- 保坂 隆 : レンドルミンD錠の効果的使用法。上島国利 (編集) 睡眠障害診療のコツと落とし穴。56-57, 中山書店, 東京, 2006
- 保坂 隆 : 身体疾患患者の精神疾患合併率について。保坂 隆 (編集) 精神科専門医にきく最新の臨床。82-84, 中外医学社, 東京, 2005
- 保坂 隆 : 身体疾患患者への集団精神療法。保坂 隆 (編集) 精神科専門医にきく最新の臨床。161-163, 中外医学社, 東京, 2005
- 保坂 隆 : 大病に罹患したらどんな気持ちになるの?。上島国利, 平島奈津子 (編集) 全科に必要な精神的ケア, 10-11, 総合医学社, 東京, 2006
- 保坂 隆 : リハビリ中の患者さんの対応で気をつけることを教えて?。上島国利, 平島奈津子 (編集) 全科に必要な精神的ケア, 12-13, 総合医学社, 東京, 2006
- 保坂 隆 : 人工透析患者の心理について教えて?。上島国利, 平島奈津子 (編集) 全科

- に必要な精神的ケア、14-15、総合医学社、東京、2006
- 酒井明夫：『標準精神医学（第3版）』、医学書院、東京、2005（分担執筆）
- 酒井明夫：『気分障害（精神科臨床ニューアプローチ2）』、メジカルビュー社、東京、2005（分担執筆）
- 酒井明夫：『神経症性障害とストレス関連性障害（精神科臨床ニューアプローチ3）』、メジカルビュー社、東京、2005（分担執筆）
- 酒井明夫：『魔術と狂氣』、勉誠出版、東京、2005
- 酒井明夫：『新規抗精神病薬のすべて』、先端医学社、東京、2005（分担執筆）
- 酒井明夫：『精神科必修：精神科医療の基本 - 第1巻：異常な精神現象の理解』、日本精神神経学会・中島映像製作所、新潟市、2005（DVD）
- 酒井明夫：『うつ病診療のコツと落とし穴』、中山書店、東京、2005（分担執筆）
- 智田文徳・酒井明夫：『精神科：専門医にきく最新の臨床』、中外医学社、東京、2005（分担執筆）
- 酒井明夫：『今日の治療指針2006年版』、医学書院、2006（分担執筆）
- 伊藤敬雄：肝移植後の統発性不眠症に対する高照度光療法とアロマセラピーの実践。編集 上島国利、中山書店、東京 2006 pp 168-170
- 伊藤敬雄：一般病棟入院中に生じた精神性理性不眠への環境調整を主とした治療法。編集 上島国利、中山書店、東京 2006 pp 175-177
- 黒木宣夫（分担）：家族と産業保健スタッフとの連携、メンタルヘルスと職場復帰支援ガイドブック。日本産業精神保健学会編集 85-95、2005. 4 中山書店
- 黒木宣夫（分担）：労災認定の基礎知識、職場のメンタルヘルスハンドブック（第2版）学芸社 65~75 2005
- 黒木宣夫（分担）：外傷後ストレス障害、神経症性障害とストレス関連障害。メジカルビュー社、94~103 2005. 5
- 黒木宣夫（分担）：職場のメンタルヘルス。星和書店 69-81, 2005
- 黒木宣夫（分担）：司法精神医学『民事法と精神医学』－労災における認定制度－。中山書店 288-300, 2005
- 黒木宣夫（分担）：健康生活コーディ第3章-3 健康生活についてとこころの病気－。千葉県健康-7, 2005
- 黒木宣夫（分担）：うつ病診療の落とし穴－過労自殺の予防・家族が気づいた特徴－。中山書店 186-187, 2005
- 黒木宣夫（分担）：うつ病診療のコツと落とし穴－精神障害の労災認定・自殺の労災認定－。中山書店 188-189, 2005
- 黒木宣夫（分担）：職場におけるPTSDと労災認定 精神科-専門医にきく最新の臨床-。中外医学社 280-283、2005
- 黒木宣夫（分担）：司法精神医学『民事法と精神医学』－不法行為に対する損害賠償請求－。中山書店 76-84, 2005
- 黒木宣夫（分担）：精神障害等の労災認定をめぐる状況：心の病〈治療と予防の現在〉。労働調査会：P100-121, 2004.

- 黒木宣夫（分担）：労災認定の仕組みと治癒・等級認定について、心の病〈治療と予防の現在〉。労働調査会：P100-121, 2004
- 黒木宣夫（分担）：家族と産業保健スタッフとの連携、メンタルヘルスと職場復帰支援ガイドブック。日本産業精神保健学会編集, 85-95, 2005, 中山書店
- 黒木宣夫（分担）：賠償・補償における精神的養陰の問題点：医療事故紛争の予防・対応の実務。新日本法規 346-365, 2005
- 黒木宣夫（分担）：メンタルヘルス・マネジメント検定試験 公式テキスト、マスターコース精神障害の労災認定。大阪商工会議所編 中央経済社 7-17, 2006
- 黒木宣夫（分担）：精神保健福祉白書 2006 年版 転換期を迎える精神保健福祉。労災補償の動向とメンタルヘルス対策。中央法規出版 76-78, 2006
- 黒木宣夫（分担）：産業人メンタルヘルス白書 2006 年版長時間残業と疲労がメンタルヘルスに及ぼす影響。財団法人 社会経済生産性本部 メンタル・ヘルス研究所 25-33 2006
- 町田いづみ 服薬援助のための 医療コミュニケーション スキルアップ。星和書店 2005, 10
- 町田いづみ 実践医療コミュニケーション学 Q&A じほう 2006, 3
- Yutaka Matsuoka: Delirium. In Albrecht G. (Eds.) Encyclopedia of Disability, pp377, Sage Publications, Thousand Oaks, CA, 2005
- Yutaka Matsuoka, Mitsue Nagamine, Yosuke Uchitomi: Intrusion in women with breast cancer. In: Kato N, Kawata M, Pitman RK (Eds) PTSD: Brain Mechanism and Clinical Implications, pp 169-178, Springer-Verlag, Tokyo, 2006
- 廣常秀人, 松岡豊：交通事故. 心的トラウマの理解とケア第二版. じほう. 東京, pp163-182, 2006
- 保坂 隆：ストレス根絶の本。ぶんか社文庫。東京, 2006
- 保坂 隆：産業メンタルヘルスの実際。診断と治療社, 東京, 2006
- 保坂 隆：「頭がいい人」は脳のリセットがうまい。中公新書ラクレ, 東京, 2006
- 保坂 隆（編集）：これから始める向精神薬療法スペシャルテクニック。診断と治療社, 東京, 2006
- 保坂 隆（監修）町田いづみ：コミュニケーションの上手な方法。照林社, 東京, 2006
- 保坂 隆（編集）精神科リスクマネジメント。中外医学社, 東京, 2007
- 保坂 隆：大病に罹患したらどんな気持ちになるの？。上島国利・平島奈津子（編集）全科に必要な精神的ケア, 10-11, 総合医学社, 東京, 2006
- 保坂 隆：リハビリ中の患者さんの対応で気をつけることを教えて？。上島国利・平島奈津子（編集）全科に必要な精神的ケア, 12-13, 総合医学社, 東京, 2006
- 保坂 隆：人工透析患者の心理について教えて？。上島国利, 平島奈津子（編集）全科に必要な精神的ケア, 14-15, 総合医学社, 東京, 2006
- 保坂 隆：リエゾン精神医学。日本病院管理学会学術情報委員会（編集）医療・病院管理用語辞典。220, エルセビアジャパン, 東京, 2006
- Matsubayashi H, Hosaka T, Makino T. : Impact of psychological distress in infertile Japanese women. In Morgan JP. (ed.) Perspectives on the Psychology of

- Aggression. Nova Science Publishers, Inc. 111-124, New York, 2006
- 保坂 隆：虚血性心疾患。上島国利・久保木富房（監修）抗不安薬・睡眠薬・抗うつ薬・気分安定薬の使い方。アルタ出版。232-235, 2002
- 保坂 隆：身体化障害、疼痛性障害・心気症。今日の治療指針 2007。705, 医学書院、東京, 2007
- 保坂 隆：地域における連携・本橋 豊（編集）：自殺対策Q & A。152-154, ぎょうせい, 東京, 2007
- 伊藤敬雄：腎機能障害・腎不全。これから始める向精神薬療法スペシャルテクニック（編集：保坂隆），診断と治療社，東京 2006 pp 225-234
- 伊藤敬雄：腎透析科。これから始める向精神薬療法スペシャルテクニック（編集：保坂隆）診断と治療社，東京 2006 pp 235-242
- 伊藤敬雄，大久保善朗：子供の睡眠障害，不眠症。小児科 金原出版（印刷中）
- Yutaka Matsuoka, Mitsue Nagamine, Yosuke Uchitomi: Intrusion in women with breast cancer. In: Kato N, Kawata M, Pitman RK (Eds.) PTSD: Brain Mechanism and Clinical Implications, pp 169-178, Springer-Verlag, Tokyo, 2006
- 広常秀人，松岡 豊：交通事故、心的トラウマの理解とケア第二版。じほう。東京, pp163-182, 2006
- 中島聰美，松岡 豊，金吉晴：PTSD. チーム医療のための最新精神医学ハンドブック（大野裕編） pp122-130, 弘文堂, 東京, 2006
- 西大輔，松岡 豊：心的トラウマと PTSD(外傷後ストレス障害)。救急医療の基本と実際<精神・中毒・災害>（行岡哲男・大田祥一編集），壮道社，東京，2007（印刷中）
- 野口普子，松岡 豊：救急医療従事者のストレスマネジメント。救急医療の基本と実際<精神・中毒・災害>（行岡哲男・大田祥一編集），壮道社，東京，2007（印刷中）
- 町田いづみ：服薬援助のための医療コミュニケーション スキルアップ 星和書店 2005, 10
- 町田いづみ：実践医療コミュニケーション学 Q&A じほう 2006, 3
- 町田いづみ 保坂 隆：24 の臨床シーンでわかる コミュニケーションの上手な方法 照林社 2006

【雑誌】

- 保坂 隆：在宅介護者の健康度と支援の必要性。精神医学 46: 562-563, 2004
- 保坂 隆：集団精神療法。CLINICAL NEUROSCIENCE 22: 216-217, 2004
- 保坂 隆：がん患者への集団精神療法。臨床精神医学 33: 627-633, 2004
- 保坂 隆：不眠症の予後決定因子。成人病と生活習慣病 34:901-903, 2004
- 加藤雅志，保坂 隆：特殊な環境で見られる精神症状。日本医師会雑誌特別号「精神障害の臨床」。S179-S182, 2004
- 加藤雅志，保坂 隆：身体疾患と精神科受診。こころの科学 115:30-36, 2004

- 保坂 隆：コンサルテーション・リエゾン精神医学からの精神障害の見方と治療姿勢。
精神科 4: 379-383, 2004
- 保坂 隆：一般身体疾患に対する精神的ケア。Pharma Medica 22: 47-49, 2004
- 加藤雅志, 保坂 隆：「医療コミュニケーション」について。臨床透析 20: 13-17, 2004
- 保坂 隆, 平井啓, 福原裕一, 高橋為生, 堀 三郎：健診受診者のコーピングスタイル
と血液生化学指標との関連。総合健診 31: 601-608, 2004
- 保坂 隆：妄想・幻覚の原因と診断のコツ。JIM 14: 848-851, 2004
- 保坂 隆：リエゾン精神医療における集団療法。精神科リエゾンガイドライン（精神科
治療学 Vol. 19 増刊号）172-174, 2004
- Okuyama T, Wang XS, Akechi T, Mendoza TR, Hosaka T, Cleeland CS, Uchitomi Y: Adequacy
of cancer pain management in a Japanese cancer hospital. Jpn J Clin Oncol 34:37-42, 2004
- Matsubayashi H, Hosaka T, Izumi S, Suzuki T, Kondo A, Makino T: Increased depression and
anxiety in infertile Japanese women resulting from lack of husband's support and feelings of
stress. Gen Hosp Psychiatry 26: 398-404, 2004
- Matsubayashi H, Iwasaki K, Hosaka T, Sugiyama Y, Suzuki T, Izumi S, Makino T: Response:
Spontaneous contraception after ten years of onfertility, giving up in-vitro-fertilization (IVF)
treatments, adoption of a child and two ovarian pregnancies: a case report. Tokai J Exp Clin
Med. 29: 201, 2004
- 保坂 隆：ストレスとA型行動パターン。埼玉県臨床工学技士会会誌 13: 11-16, 2004
- Matsubayashi H, Shida M, Kondo A, Suzuki T, Sugi T, Izumi S, Hosaka T, Makino T: Preconception peripheral natural killer cell activity as a predictor of pregnancy outcome in
patients with unexplained infertility. Am J Reprod Immunol 53: 126-131, 2005
- Kamiyama K, Yamami N, Sato K, Aoyagi M, Kyoya M, Mizuno E, Uemura M, Kawamoto Y,
Okuda M, Togawa S, Shibayama M, Hosaka T, Mano Y: Effects of a structured stress
management program on psychological and physiological indicators among marine hazard
rescues. J Occup Health. 2004 Nov;46(6):497-9.
- Okuda M, Uemura M, Yamami N, Ogihara R, Mano Y, Hosaka T, Mizuno E, Aoyagi M.: A study
on fatigue and health disturbance in caregivers of the elderly at home. プライマリ・ケア 27:
9-17, 2004
- 武内克也, 酒井明夫 : 2004, 「Risperidone 内用液を使いこなす第2回：急性期への対応
(その2)」, 臨床精神薬理 7:127-135
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医療：癒しの多様性」, 教育と医学, No. 607: 78-86
- 武内克也, 酒井明夫 : 2004, 「Risperidone 内用液を使いこなす第3回：コンプライアン
スの向上を目指して」, 臨床精神薬理 7:295-303
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医学史探訪 III : 笑うデモクリトス」, 精神科 4(1):44-48
- 武内克也, 酒井明夫 : 2004, 「Risperidone 内用液を使いこなす第4回：再発再燃防止の
可能性と再発再燃時の対応について」, 臨床精神薬理 7:447-456
- 大塚耕太郎, 星克仁, 智田文徳, 黒澤美枝, 中山秀紀, 遠藤知方, 高谷友希, 丸田真樹, 高橋紀
子, 荒木三奈, 佐藤セイ子, 関合征子, 北畠顯浩, 千葉俊美, 鈴木順, 西信雄, 大野裕, 岡
山明, 酒井明夫 : 2004, 久慈地域における自殺予防の取り組みについて：自殺多発地

域における中高年の自殺予防を目的とした地域と医療機関の連携による大規模研究、
北リアスの汐 8:95-101

- 武内克也, 酒井明夫 : 2004, 「Risperidone 内用液を使いこなす第 5 回 : 適応外疾患への応用 (その 1)」, 臨床精神薬理 7: 723-731
- Otsuka, K. and Sakai, A. : 2004, Haizmann's Madness: the Concept of Bizarreness and the Diagnosis of Schizophrenia, History of Psychiatry 15(1):073-082
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医学史探訪 IV : ヘラクレスの泡」, 精神科 4(3):205-210
- 藤原恵真, 大塚耕太郎, 遠藤知方, 黒澤美枝, 星克仁, 渡邊温知, 奥山雄, 野村豊子, 智田文徳, 酒井明夫 : 2004, 老人保健施設に入所中の中等度アルツハイマー型痴呆患者に対する回想法の効果, 精神科治療学, 19(4) :513-518
- 武内克也, 酒井明夫 : 2004, 「Risperidone 内用液を使いこなす第 6 回 : 適応外疾患への応用 (その 2)」, 臨床精神薬理 7:917-926
- 武内克也, 酒井明夫, 大塚耕太郎, 遠藤知方, 奥山雄, 高谷友希, 金沢ひづる, 柴田恵理 : 2004, 統合失調症の救急外来対応における risperidone 内用液の有用性 : risperidone 内用液導入前後の比較と検討, 臨床精神薬理 7:809-819
- 及川暁, 酒井明夫 : 2004, 介護老人保健施設における痴呆の治療環境, Cognition and Dementia 3(2):172-176
- 伊藤欣司, 酒井明夫, 大塚耕太郎, 中山秀紀 : 2004, 臨床研修必修化に向けた精神科救急からの主張, 精神科救急 7:23-27
- 武内克也, 酒井明夫, 大塚耕太郎, 遠藤知方, 丸田真樹 : 2004, 脊髄小脳変性症の興奮、衝動行為に risperidone 内用液が有効であった 1 例, 神経内科 60(2):183-188
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医学史探訪 V : シャルルル 6 世の煉獄」, 精神科 4(5):332-338
- 武内克也, 酒井明夫, 大塚耕太郎, 遠藤知方, 奥山 雄, 高谷友希, 柴田恵理, 金沢ひづる, 丸田真樹 : 2004, 老年期発症の音楽幻聴, 精神科治療学 19(6):763-769
- 金沢ひづる, 大塚耕太郎, 酒井明夫, 間藤光一, 高谷友希, 柴田恵理, 丸田真樹, 山田聰敦, 中山秀紀, 智田文徳, 武内克也, 川村 諭 : 2004, 慢性甲状腺炎 (橋本病) によって周期性錯乱状態を呈した一例 : FT₃ 値と精神症状の関係, 精神科治療学 19(6):757-762
- 大塚耕太郎, 酒井明夫 : 2004, 自殺予防における介入の意義, 臨床精神薬理 7: 1111-1117
- 酒井明夫 : 2004, 書評「高齢者薬物療法—精神疾患治療へのアプローチ」(村崎光邦, 大谷義夫編著), 老年精神医学雑誌 15(6) 781
- 黒澤美枝, 西 信雄, 野原 勝, 大塚耕太郎, 酒井明夫, 岡山 明: 2004, 医療従事者のうつ病患者への対応に関連した知識・意識について : 自殺多発地域における地域介入研究より, 日本医師会雑誌 131(11):1791-1797
- 智田文徳, 酒井明夫, 高谷友希, 青木康博 : 2004, 地域と医療機関の連携による自殺予防活動, 最新精神医学 9(4):301-310
- 智田文徳, 酒井明夫, 高谷友希, 青木康博 : 2004, 自殺予防活動におけるプライマリ・ケアの役割, Pharma Medica 22(8):15-18
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医学史探訪 VI : カリグラの逸脱」, 精神科 5(1):52-58

- 大塚耕太郎, 酒井明夫 : 2004, うつ対策と自殺予防, ストレス科学 19(1) :70-77
- Chida, F., Okayama, A., Nishi, N. and Sakai, A. : 2004, Factor Analysis of Zung Scores in a Japanese General Population, Psychiatry and Clinical Neuroscience 58: 420-426.
- 酒井明夫 : 2004, 精神医学史の機能。精神神経学雑誌 106(6) :744.
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医学史探訪 VII : 酷酊するアレクサンドロス大王」, 精神科 5(3) :231-237
- 川村諭, 酒井明夫, 智田文徳, 山家健仁, 吉田智之, 武内克也, 大塚耕太郎, 間藤光一 : 2004, プロゲステロン製剤が有効であった周期性精神病の1例, 精神科 5(3) :254-258
- 鈴木満, 奥山雄, 金沢ひづる, 間藤光一, 布澤文理, 酒井明夫 : 大脳白質の細胞生物学的研究 : White Matter Disease の病態理解を目指して, 脳と精神の医学 15(3) :301-310
- 酒井明夫 : 2004, 「精神医学史探訪 VIII : カンビュセス2世の暴虐」, 精神科 5(5) :393-397
- 大塚耕太郎, 酒井明夫, 大野 裕, 黒澤美枝, 智田文徳, 中山秀紀, 星克仁, 関合征子, 松川久美子, 稲田昌博, 橋本 功, 長岡重之, 深瀬享三 : 2004, 中高年の自殺とその防止対策。臨床精神医学 33(12) 1565-1575
- 黒澤美枝, 坂田清美, 板井一好, 小野田敏行, 小栗重統, 酒井明夫, 西信雄, 岡山明 : 2004, 住民を対象としたうつ病教育の実際。岩手公衆衛生学雑誌 16(2) :34-45
- 大塚耕太郎, 酒井明夫, 武内克也, 間藤光一, 柴田恵理, 丸田真樹, 山田聰敦, 高谷友希, 山家健仁, 福本健太郎, 磯野寿育, 遠藤知方 : 2005, 焦燥感、不眠、持ち越し効果に クアゼパムが奏功した大うつ病の中高年男性症例。新薬と臨床 54(1) :46-50
- 酒井明夫 : 2005, 「精神医学史探訪 IX : アンティオコス1世の脈拍」, 精神科 6:52-56
- 武内克也, 酒井明夫 : 2005, 抗精神病薬内服液の特徴とその使用法, 脳 21, 8(1) :65-68
- 大塚耕太郎, 酒井明夫 : 2005, 自殺多発地域における自殺予防の取り組み, みやこ医報 3-4.
- Nishi,N., Kurosawa,M., Nohara,M., Oguri, S., Chida,F., Otsuka,K., Sakai,A. and Okayama,A.: 2005, Knowledge of and Attitudes toward Suicide and Depression among Japanese in Municipalities with High Suicide Rates, *Journal of Epidemiology* 15(2):48-55.
- 伊藤敬雄, 葉田道雄, 木村美保ほか : 高次救命救急センターに入院した自殺未遂患者とその追跡調査 -精神科救急対応の現状を踏まえた1考察-. 精神医学 46, pp 389-396, 2004
- 伊藤敬雄 : 介護ストレス以外の高齢者虐待の原因 -ADL が自立していた四症例報告からの検討-. 臨床精神医学 33, pp 1617-1622, 2004
- 伊藤敬雄, 大久保善朗 : アルツハイマー型痴呆患者におけるメラトニン療法。老年医学 Vol. 42, pp 2001-2006, 2004
- 伊藤敬雄, 大久保善朗 : 日常診療に用いられる薬剤の上手な使い方と服薬指導 1 9. 睡眠導入剤。成人病と生活習慣病 Vol. 35, pp 95-99, 2005
- Kishi, Y., Meller, W.H., Swigart, S.E., Kathol, R.G, Are the patients with post-transplant psychiatric consultation different from other medical-surgical consultation inpatients? Psychiatry Clin Neurosci, 2005;59(1):19-24